

あんげろす

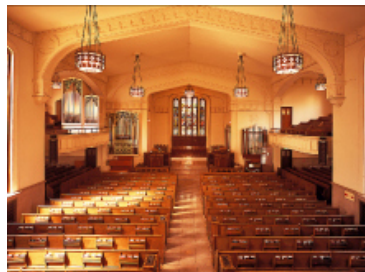
東北学院と明治学院

大西晴樹

4月より、仙台の東北学院大学に奉職している。東北学院も明治学院も同じプロテスタント改革派教会の支援によって設立された元男子校である。東北学院は、アメリカ・ドイツ改革派教会の支援によって1886年に設立された仙台神学校を嚆矢とする。初代院長はブラウン塾出身の押川方義であり、島崎春樹も一年に満たない期間であるが、教鞭を執った。第2次世界大戦中、明治学院は、空襲を避けるためにヘボン関連資料を東北学院に預けたという。

東北学院大学には工学部があるが、両校ほぼ同様の学部構成と規模である。そして、旧キリスト教学科の流れを汲む総合人文学科に、優秀なキリスト教研究者たちが揃っている。活発な学術的交流が望まれる次第である。

おおにし・はるき（名誉所員）



ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
(東北学院大学 土樋キャンパス)

高くそびえたつ三つの城壁

李 相勲

三つのことに触れたい。一つ目は、『あんげろす』第78号にて永野茂洋先生も言及されておられるカネミ油症事件に関連したことである。十数年前のことであるが、北九州で開催された日・韓・在日キリスト者青年共同の研修プログラムに参加する機会があった。その際、ある青年と二人で、日本キリスト教団福吉伝道所（当時）の犬養光博牧師が行っていたカネミ倉庫前での座り込みに参加させていただくこととなった。犬養牧師は、「無関心は、公害殺人の、加害者です」との紙野柳蔵氏の言葉に触れ、カネミ油症を告発する運動に関わるようになり、座り込みは1970年から毎月一回のペースで続けておられた。前日深夜まで青年たちと話し込んだこともあり、眠い目をこすりながら、また冬の寒さに震えながらカネミ倉庫前に設置された小さなテントに着くと、犬養牧師が温かなコーヒーとともに迎えてくださった。それを飲みながら少しの間3人で世間話をしていると、時間になったということで犬養牧師はメガホンを片手に立ち上がり、高い塀に囲まれたカネミ倉庫側に向かって丁寧な口調で懇々と事件に対する責任をとるべきことを訴え始めた。その姿を見ながら私は、「エリコの城壁」の前で吹かれたあの角笛（ヨシュア 6:16）を連想した。エリコ側からすれば侵略者が鳴らす角笛であったことを勘案すれば、適切な連想ではなかったとも思うが、とにかくその時、高くそびえたつエリコの城壁とカネミ倉庫の塀が重なり、それが崩れる幻を見た思いがしたのであった。

二つ目は、米国政府がパリ協定からの正式離脱を通告したことをめぐる最近の報道に関してである。その報道に接して腹立たしく思う一方、私の頭にはある仮定が浮かんだ。それは、もし離脱通告をしたのが米国でなく韓国であったならどのような報道になっていたであろうか、というものであった。日本のマスメディアでは韓国パッシングが続いているが、そのことで新たな韓国パッシングが連日続くであろうことは想像に難くない。一方、米国の離脱通告に対

する批判は日本のマスメディアにおいてそれほど大きくなされていないように思われる。歴史学者の酒井直樹氏や尹健次氏らによれば、明治以降、「日本人」アイデンティティは、憧れの対象である「西洋」と蔑視の対象である「アジア」を「他者」として措定する中で形成されていったというが、韓国や米国をめぐっての日本のマスメディアの姿勢を見ると、現在でも同じ形で「日本人」アイデンティティが形成されていっており、特に最近では、韓国（および北朝鮮）を蔑視の対象として「他者」化し、韓国との間に「高い城壁」を築きつつ、そのことが推進されていっているように思われる。

三つ目は、再び北九州に関連したことである。2000年代に入って北朝鮮による日本人拉致の事実が明らかとなり、日本中で北朝鮮パッシングが激しく起こっていた時期に北九州の小倉を訪問したことがあった。その際、JR小倉駅付近で署名活動が行われていたのであるが、その訴えの内容は北朝鮮への憎悪を露わにしたものであった。私は、小倉という地域においてそれに遭遇し、一層複雑な思いにさせられた。小倉を含む北九州地域は、まさに朝鮮人強制連行の「現場」であったからである。特にそこにおいては、本来なら強制連行と拉致をめぐっての民衆間の連帯が成り立つべきとも考えられるのであるが、「国民」（＝民族）間に築かれた「高い城壁」が連帯への障壁となってしまっていることを痛感させられる遭遇であった。

私たちが崩すべき「高い城壁」は少なくとも三つあると思う。加害者と被害者間にそびえたつ壁、被害者と人々を分ける「無関心」という名の壁、民衆間の連帯を阻害する「国民」という名の壁である。最後の壁は、朝鮮半島に関してはさらに高く築かれつつある。さて私たちは、これらの壁に向かって「角笛」をどのように吹くのであろうか。



い・さんふん（協力研究員）

「筑豊」に出会い、イエスと出会う

犬養光博著、いのちのことば社、2018年

日本不是福音的冻土

王 艾明

在整个华人基督教世界，尽管林林总总，各自为政，但对于日本却有一个大致相同的印象和判断，即，日本是福音的冻土。这就是说，海外华人福音派各种宣教活动，可以在世界各地，包括中国大陆广袤无际的乡村和熙熙攘攘的城市，却很难在日本站立得住。因此，华人基督教界就形成了这样的看法。那么，是不是日本基督徒都是边缘化的群体，他们无依无靠，被拜偶像的日本主流社会所歧视和排挤？在华人福音派的词汇中，佛教徒、神道教徒和其它民间宗教徒都是拜偶像者，一律被鄙视和不屑一顾。这样，日本民众中绝大多数就属于拜偶像的界定。于是，基督教信仰，在日本就非常罕见和弱小。这就是华人基督教界对日本基督教的印象。

那么，究竟是不是这样？按照基督徒在日本总人口中的比例来看，各种不同教会传统中的会友的确不多，仅仅是总人口的百分之一左右。带着同样的感觉，我访问了日本，第一次主要是访问日本联合教会，日本圣公会，日本天主教，访问他们各自的大学、神学院、教会和幼儿园，还有基督教的出版社、书店和媒体等，给我的印象完全不是华人基督教世界已经形成的那样。第二次访问日本，更加使我明白了基督教在日本社会中的真实情况，完全否决了华人基督教界对日本基督教的消极和负面的界定。

我的判断是基于 Abraham Kuyper 从加尔文神学传统中所传承下来的重要教义原则，即，普遍恩典论 (Doctrine of Common Grace)，就教会教义而言，它是一条教义，而就人文科学议题而言，它就是一种价值系统，或价值原则。可以帮助我们超越基督教的宗派主义狭隘的视野，特别是受到近代启蒙主义和自由主义思潮影响下的宗教信仰私人化之历史大趋势的暗示和影响。根据普遍恩典论，基督教所信奉的真理对于基督徒来说是福音，具有救赎的恩典和意义，而对于非基督徒和世俗世界，十字架的真理往往是通过诫命、法度和规则，即公共价值系统和基于公平正义的法律秩序来彰显和产生效

用。当近代以来，西方各种思潮震荡和冲击下，以大一统的教会为基础的千年基督教文明(Christendom) 越来越呈现出分崩离析和碎片化，大量的独立教会自生自灭，此起彼伏，整个以教会为特征的基督教世界越来越世俗化，看上去不再主导西方文明的发展方向。

而日本是亚洲最发达的法治国家，最具现代化秩序的国家，或者说，汲取西方法治文明和科技文明最成功的亚洲国家，因此，西方国家所面临的情况，日本也同样面临着。就我的观察而言，基督教文明所具有的价值系统并没有在西方国家减弱和消退，尽管各种教会出现各种不同的问题和消亡，基督徒人数越来越少。日本的情况完全一样，我们可以断定的是就普遍恩典而言，日本社会的“自由、民主、对基本人权的尊重、法治等普世价值和规则”是基于基督教文明传统的价值系统。

这样的情况来看，我获得的清晰结论是：日本是华人福音派的冻土，却完完全全是福音的美地沃土。

(日本語訳)

日本は福音の凍土ではない

王 艾明

(翻訳：松谷暉介 協力研究員)

華人キリスト教界内部は総じて多種多様ですが、しかし日本に対しては「日本は福音の凍土である」という共通した印象や評価を持っています。このことは、海外華人系の福音派諸教会のさまざまな宣教活動が、中国大陸を含め世界各地のどこの村や町でもなされているのに対して、日本においてはそれが困難であるため、華人系福音派教会ではそのような見方がなされるようになったといえるでしょう。

では日本のキリスト者は皆、周辺化されてしまった頼りない集団であり、偶像崇拜をする日本の主流社会から差別されたり排斥されたりしている、とでもいうのでしょうか？華人福音派の中では、仏教信者や神道信者、その他の民間宗教の信者たちは皆、偶像崇拜者であると蔑視され、

一顧だにされません。このような彼らの定義によれば、日本人の大多数は偶像崇拝者であり、日本においてはキリスト教信仰は非常に稀であり弱い、ということになってしまいます。これが華人系福音派教会の多くが日本のキリスト教に対して持っている一般的な印象です。

しかし本当にそうなのでしょうか？日本の総人口に見るキリスト教信者の割合から見れば、諸教派の教会員数は確かに多くはなく、総人口のわずか1パーセントにしか過ぎません。私も当初は華人系福音派の人々と同じような感覚を持っていたのですが、2012年の第一回目の来日の際、日本キリスト教団をはじめ聖公会やカトリック教会、またいくつかのキリスト教大学、神学校、キリスト教出版社・書店などの訪問を通して得た印象は、華人系福音派教会が持っていた日本への印象とは全く異なるものでした。また2017年の第二回目の来日の際には日本におけるキリスト教の本当の状況をより明確に理解することができ、華人系福音派教会が日本のキリスト教に対して持っている否定的なマイナス・イメージが全く間違っていると考えるようになりました。

私の理解は、アブラハム・カイパー [Abraham Kuyper、1837- 1920、オランダの政治家、神学者] がカルヴァン神学の伝統の中から継承した「一般恩恵」(Common Grace)の教理に基づいています。それは教義学的に言えば一つの教理ですが、人文科学的に言えば一種の「価値体系」或いは「価値原則」です。「一般恩恵」は、私たちがキリスト教内の教派主義という狭い視野や、特に近代の啓蒙主義や自由主義の影響による宗教信仰の個人化 [プライベート化] を克服すべきであるという歴史的な大趨勢を指し示しています。「一般恩恵」に基づくならば、キリスト教が信奉する十字架の真理は、一方では、キリスト者にとっては福音であり、救いの恵みという意味を持つものです。しかし他方では、非キリスト者や世俗世界にとって、十字架の真理は「命令、法、規則」といった公共的価値体系を通して、また公平かつ正義の法的秩序に基づいて [この世界・社会に] 表出され、また効果を生み出すものです。

近代以来、西洋社会ではさまざまな思想的な動揺・衝撃により、教会を基礎としていた千年以来にもわたる一枚岩的なキリスト教文明 (Christendom) が次第に崩壊し、断片化されていきました。そして、それに伴い、無数の教会・教派が生まれては消え、教会を特徴としていたキリスト教世界全体が次第に世俗化されてしまったため、一見すると、キリスト教文明はもはや西洋文明の発展をリードしていないかのように思われています。

日本はアジアで最も発展している法治国家であり、近代化の秩序を最も有している国家です。換言するならば西洋の法治文明と科学技術文明を汲み取ることで最も成功したアジアの国家であるといえます。したがって、西洋諸国が直面してきた状況に、日本もまた同じように直面しています。私の観察するところでは、確かに西洋諸国においてそれぞれの教会が様々な問題を抱えたり、消滅したり、キリスト者はますます減少していますが、しかしキリスト教文明が持っていた価値体系は決して弱まったり、消え去ったりはしていません。日本の状況もこれと全く同じです。「一般恩恵」に基づいて言うならば、日本社会の法や秩序、自由、民主、憲政などはキリスト教文明・伝統の価値体系に基づいていると断定することができます。

こうした状況から私が得た一つの明確な結論は、日本は華人系福音派教会の目には凍土であっても、実際にはむしろ実に豊かな福音の美しき沃土である、ということです。

わん・あいみん (客員研究員)

翻訳：まつたに・ようすけ (協力研究員)

王艾明先生の略歴：1963年生まれ、南京師範大学卒業(86年)、南京大学修士課程修了(89年)。スイスのバーゼル大学神学博士号(03-08年)取得、金陵協和神学院副院長を10年以上務める。2016年から3年間、カナダ・トロントの中国系教会で北京語礼拝担当牧師を務めた後、2019年10月より明治学院大学キリスト教研究所客員研究員として来日。現代中国を代表する神学者。著書に *Church in China: Faith, ethics, structure*、『マルティン・ルターとプロテスタント倫理の研究』、『カルヴァンと中国教会』、『体制教会と自由教会』など。邦訳著書として『王道—21世紀の中国教会と市民社会のための神学』新教出版社、2012年。

2017年度から、日本社会文学会という小さな学会の運営委員長を務めている。去る11月3～4日には、かねてよりの念願であった韓国での大会開催（東国大学校共催）を実現することができた。テーマは「三・一独立運動、五・四運動百年」である。

三・一独立運動も、五・四運動も、今日、韓国、中国、それぞれの国において、旧大日本帝国の植民地主義に抵抗した愛国的実践として記念されている。しかし実際は、三・一独立運動やそれに先立つ二・八独立宣言の背景に、辛亥革命を経た中国人の助けがあり、逆に三・一独立運動という非暴力革命の試みは、中国や台湾でも報道され、五・四運動にも影響を与えたという。さらにはわずかながら、これらの運動に理解を示し、及ばずながらも支援しようとした日本人もいたという。ならばこれら百年前の運動を、東アジア全体の民主化運動の遺産として共有してもいいのではないか——それがこの大会のねらいであった。尤も日本近代文学は、残念ながらこれらの運動に深くはコミットしなかったが、なぜ文学がこれらの運動に関与できなかったかを省察することが、新しい連帯につながるだろうとも、企画者のひとりとして考えたのである。

会場では、必ずしもこの主旨には賛同できない旨の発言もあったが、それでも、今のように日韓の深刻な政治的対立がある中で、韓国の共催校から最大限のもてなしを受けて、百年前の遺産について語り合う場を得られたこと自体が、大きな成果であった。

不良のクリスチャンながら、常々感じる基督教の魅力は、神の愛が国境をこえてあまねく人々に注がれているとするところである。たとえ私が彼（女）らのサマリア人であっても、そんなことには関係なく、私たちは互いに隣人になれるのである。

あらゆる隣人の皆様が、幸せなクリスマスをお迎えになりますようお願いいたします。

しのぎき・みおこ（主任）

研究所活動（2019年7月～2019年11月）

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会
「アンダーウッド宣教師とその宣教活動について」

開催日時：2019年7月6日（土）13:00-15:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 キリスト教研究所

講演者：丁修善（ジョン・スソン）

（東京外国語大学博士課程在籍）

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会
「わたしがであった天皇制 代替わりを前に」

開催日時：2019年7月27日（土）13:30-15:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館9階 92会議室

講師：崔善愛氏（ピアニスト）



講師の崔善愛氏



研究会の様子

キリスト教研究所 1 日研究会

開催日時：2019 年 7 月 27 日(土) 15：00-17：40

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 92 会議室

発表①

「賀川豊彦『死線を越えて』はいかなる意味で「社会小説」であったのか—第一次世界大戦後の文壇・批評壇の期待の地平を読み解く」

発表者：田中祐介(教養教育センター専任講師、所員)

発表②

「雑誌『家の光』に表れる賀川豊彦の言説と行動—産業組合とキリスト教思想との親和性を基底として考える—」

発表者：河内聡子氏

(東北大学大学院文学研究科・専門研究員)

コメント：永野茂洋 所員 (教養教育センター教授、所員)

懇親会

開催日時：2019 年 7 月 27 日(土) 18：20-20：30

開催場所：CONA 目黒店

キリスト教研究所 公開研究会

「バッハに 燃え尽き症候群はあったか — バッハの晩年に関する新たな知識」

開催日時：2019 年 8 月 2 日 (金) 19：00-20：30

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館 2 階 1201 教室

講師：ミヒャエル・マウル

(ライブツィヒ・バッハ音楽祭総監督)

通訳：樋口隆一 (明治学院大学名誉教授・

明治学院バッハ・アカデミー芸術監督)

司会：加藤拓未 (協力研究員)



講師のミヒャエル・マウル氏 (右) と通訳の樋口隆一氏



会場の様子

キリスト教研究所公開講演会

「東アジアのキリスト教宣教の環境—中国と北朝鮮を中心に」

開催日時：2019 年 9 月 16 日 (月) 15：00-17：00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館 9 階 92 会議室

講師：金 興洙氏

(牧園大学名誉教授、韓国 YMCA 全国連盟理事長)

通訳：朱海燕 (協力研究員)



講師の金興洙氏

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会

「中国キリスト教をめぐる近年の状況」

開催日時：2019年10月8日（火）14：00-16：30

開催場所：明治学院大学白金校舎 キリスト教研究所

講師：王艾明氏（元・金陵協和神学院副院長・客員研究員）

通訳：松谷曄介（協力研究員）

第5回賀川豊彦シンポジウム SDGs と賀川スピリッツ

「だれ一人とり残されることのない社会」

開催日時：2019年11月9日（土）13：30-16：30

開催場所：明治学院大学白金校舎 2号館 2301教室

基調講演：村木厚子（津田塾大学客員教授、日本生活協同組合連合会理事、日本農福連携教会副会長理事、若草プロジェクト呼びかけ人、元厚生労働事務次官）

テーマ講演：濱田健司（JA 共済総合研究所主任研究員）

コメンテーター：

逢見直人（日本労働組合総連合会会長代行）

稲垣久和（東京基督教大学特別教授、同大学公共福祉研究センター長、本研究所協力研究員）

コーディネーター：伊丹謙太郎（千葉大学特任助教）

共催：賀川シンポジウム実行委員会、賀川記念講座委員会、キリスト教研究所賀川豊彦研究・卒業生調査研究プロジェクト

村木厚子氏



村木厚子氏



濱田健司氏

2019年度第3期 「アジア神学セミナー」

【開講日】 毎週金曜日 18:25~20:25

【開講場所】 明治学院大学白金校舎 81 会議室等

7/5 現代中国の政治とキリスト教（松谷曄介協力研究員）

7/12 韓国 3.1 独立運動 100 周年とキリスト教
（徐正敏所長）

10/11 アジア神学の歴史—帝国主義宣教から
民衆神学まで（徐正敏所長）

10/18 植民地支配下のキリスト教 「満洲国」を事例に
（渡辺祐子所員）

10/25 日韓キリスト教の遺産（洪伊杓協力研究員）

11/1 賀川豊彦の生涯と思想
（加山久夫 明治学院大学名誉教授）

11/8 ある明治人のキリスト教との出会い 松山高吉論
（嶋田彩司所員）

11/15 芥川作品にみるキリスト教（篠崎美生子主任）

11/22 アジアにおいて聖書を読むとはどういうことか
（永野茂洋所員）

11/29 アジア神学と食文化（植木献所員）

新着図書

- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2019。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 106、日本基督教団出版局、2019。
- ・『修道院の歴史』杉崎泰一郎著、創元社、2015。



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第80号

2019年12月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩